

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	DU Hui
学位	博士(文学)
学位記番号	新大院博(文)第56号
学位授与の日付	令和2年9月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	現代中国語のヴォイスに関する研究 ——能動文、受身文、使役文の意味・機能を中心に——
論文審査委員	主査教授 朱 継征 副査教授 大竹芳夫 副査 准教授 江畑冬生

博士論文の要旨

中国語の能動文、受身文、使役文に関しては、それぞれ個別の文法項目としてこれまで盛んに研究されてきた。しかしながら、三者の相似点と相違点の解明を試みる研究は少ない。実際には、意味上、三者には内的関連性があり、同形式の構文が使われることもある。例えば、“让”構文は受身文としても、使役文としても使われることがあり、“把”構文は能動文としても、使役文としても使われることがある。

本論文は、「ヴォイス」という上位概念を設定し、その下位概念として能動文、受身文、使役文を取り扱うことで、三者の文法上、意味上の相似点と相違点を解明するとともに、ヴォイス体系の本質と全体像を明らかにするものである。

本論文は次の6章から構成される。

- 第1章 序論
- 第2章 中国語のヴォイス構文の体系
- 第3章 中国語の能動文
- 第4章 中国語の受身文
- 第5章 中国語の使役文
- 第6章 結論

第1章では、中国語の能動文、受身文、使役文の意味・機能を体系的に解明するために、ヴォイスの概念を導入することを主張した。英語や日本語における同種の構文に関する先行研究を検証し、本論文で考察する中国語のヴォイス及びヴォイス構文を明確に定義した。あわせて、

本論文の目的、研究対象、研究方法と論文構成についても述べた。

第2章では、まず、中国語の無標・有標ヴォイス構文の構造を論じ、本論文で考察対象とする中国語の能動文、受身文、使役文を同定した。次に、各構文要素の文法関係により中国語のヴォイス構文とその下位分類の構文を体系化した。

さらに、中国語のヴォイス構文の体系上の特徴を日本語の対応する構文の特徴と比較対照することで、その普遍性と個別性を明らかにした。

第3章では、中国語の能動文の特性について、その下位分類である“把”能動構文を主な考察対象として分析した。第一に、中国語の能動文に関する先行研究の成果と問題点を検証し、受身文との比較を通して、情報構造と意味の観点から中国語の能動文の基本的特性を明らかにした。第二に、無標能動構文との比較を通して、能動文の下位分類である“把”能動構文の意味・機能を実証的に解明した。

第4章では、中国語の受身文の特性について、その下位分類である“让”受身構文を主な考察対象として分析した。第一に、中国語の受身文に関する先行研究の成果と問題点を検証し、能動文との比較を通して、情報構造と意味の観点から中国語の受身文の基本的特性を解明した。第二に、“被”受身構文との比較を通して、受身文の下位分類である“让”受身構文の意味・機能を明らかにした。

第5章では、中国語の使役文について、その下位分類である“让/叫/使/把”使役構文を主な考察対象として分析した。第一に、中国語の使役文に関する先行研究の成果と問題点を検証し、能動文、受身文との比較を通して、使役文の基本的特性を明らかにした。第二に、使役文の意味構造を体系的に分類し、統一的な見地から“让/叫/使/把”使役構文の意味的・機能的特徴を説明した。

第6章の結論では、本論文の内容を総括し、研究成果をまとめた。また、本論文の独創性及び今後の研究課題についても述べた。

審査結果の要旨

本論文は、まず、統一的な基準で中国語のヴォイス構文を分類し、中国語のヴォイス構文の体系を明らかにした点で独創的である。また、ヴォイス構文の体系に基づいて、能動文、受身文、使役文をヴォイス構文の下位概念として扱い、それぞれの意味・機能を明らかにした。さらに、“把”能動構文、“被”受身構文、“让”受身構文などのヴォイス構文の意味的・機能的特徴を解明した点も高く評価できる。

考察と分析の結果、以下の研究成果が得られたことは評価に値する。

1) 本論文が英語学、日本語学におけるヴォイスの定義を検討し、中国語の言語現象と関連付けながら、「ヴォイス」、「ヴォイス構文」という概念を新たに定義した点は、評価できる。

2) 本論文が統一的な基準で中国語のヴォイス構文を分類し、ヴォイス構文の体系を明らかにしている点、また、ヴォイス構文の体系という総合的視座から能動文、受身文、使役文を定義・分析している点は、独創的な着眼点であり興味深い。

3) 本論文は、“把”能動構文の成立要件として、動作対象の「絶対的・相対的状态変化」、動作対象の「絶対的・相対的既存性」という制約を新たに提案した。また、“把”能動構文は、動作対象への「関心」、動作主への「責任付与」などの意味的特徴、“把”能動構文は、「命令・警告」文に用いられる機能を論証している点で優れている。

4) 本論文は、“让”受身構文は、動作主が非意図的な動作主である場合、動作主の動作対象に対する認識を表現する場合、動作・行為が動作対象に対して「有益」であるなどの場合に不適格となることを論証した。また、“让”受身構文は、動作対象への「責任付与」の意味的特徴、動作対象の被害認識がないということを表す機能について詳しく論じている点は興味深い。

5) 本論文は、「使役主は意図性があるか否か」、「被使役主は意図性があるか否か」、「動作はコントロールできるか否か」という3つの意味的基準によって使役文の意味構造を分類し、“让”使役構文、“叫”使役構文、“使”使役構文、“把”使役構文の示差的特徴、つまり意味的相違を明らかにした点は評価できる。

杜暉氏の論文の大きな意義は、中国語のヴォイス構文の体系化という作業により、各レベルのヴォイス構文を分析する基盤を固めたことにある。また、本論文は、機能的構文分析の立場から各ヴォイス構文の意味的相違、機能的相違を細部まで詳しく論じることにより、能動文、受身文、使役文の意味・機能を解明した。当該研究成果は、今後の中国語のヴォイスに関する研究を一步前進させるものと考えられる。

なお本論文の第3章と第5章は、それぞれ『東方学術論壇』、『日中言語対照研究論集』所収の論文として一定の評価を得た内容に基づき、加筆及び再構成を行ったものである。

以上から本論文審査委員会は、当論文が博士論文として十分な水準に達していること、また言語学固有の分野に関する内容の論文であることから、博士(文学)の学位を授与するに値するものであると結論づけた。